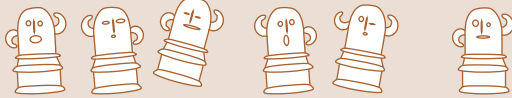
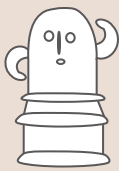




夏休みの宿題は、埋蔵文化財センターにおまかせ！あ、でも、歴史分野だけね。



水戸の時空を ひとまたぎ

第5回

調査員のジレンマ



発掘調査の成果が紙面などを飾ることがあります。大発見は、喜ばしいことです。しかし、喜んでばかりもいられないのが調査員の本音。彼らが背負う使命と、ジレンマを少しだけお話ししましょう。

問合せ／埋蔵文化財センター

(☎269・5090)



開発に伴う発掘調査で墳丘を断ち割られた古墳(西原古墳群)



解体される前の横穴式石室(西原古墳群)

発掘調査の終了とともに、調査対象であった遺構群は、写真や図面の記録を残して、この世界から永遠に失われてしまいます。

発掘調査報告書の冒頭には必ず、「埋蔵文化財は、その性格上、一度破壊されると二度と原状に復すことはできない」という一文が記されます。「破壊」と言うと、宅地整備などの開発行為を想像するでしょうか？でも、実は、発掘調査自体も遺跡にとっては破壊なのです。発掘調査に着手すると、遺跡はその瞬間から劣化を始めます。まさに、容赦のないカウントダウン。調査区をプールのようにする雨も、日照りも、地中を荒らすモグラも、遺跡の劣化原因なのです。

学術研究による発掘調査の場合、遺跡は残りますが、土を動かした時点で、元の姿ではなくなってしまいます。また、開発行為などに伴う発掘調査では、その後、遺跡は壊れてしまいます。十分な記録をとることで、遺跡を保存したとみなされますが、遺跡にとっての最善とは、「元の姿のままに原状保存すること」なのです。

遺跡などの文化財は保護されるべき対象ですが、現代の人々の生活のため壊さなければならぬ場合があることもまた事実。これが、調査員が常に抱える二律背反であり、ジレンマです。宝探しのように思われがちな発掘調査ですが、第一の目的は、不足なく、一日でも早く、少しでも多くの情報を吸い上げ、記録に残すことです。私たち調査員の使命は、遺跡の最期に立ち会い、かつてそこに人が生きた証を、今、そしてこれから生きる人々に伝えること。この使命を背負って、今日も、全力全開で発掘調査に臨むのです。

埋蔵文化財センター 米川暢敏



特撮ヒーローを愛する今月のダイダラボウYが、作業員さんについて語るよ。

ダイダラボウのひとりごと ～尊敬！すごいぞ、作業員さん～

発掘調査で、調査員の指示を受けて助けてくれるのが、頼もしい作業員の皆さん。なかには、この道40年の大ベテランもいるんだよ。付き合いが長い作業員さんになると、調査員の考えなんてお見通し。調査の段取りを先読みして動いてくれる自慢の仲間たちさ。

そんな作業員さんも、もとは普通の主婦や会社員だったっていうんだから驚きだよ。人生の大先輩でもあるから、休憩中に人生相談に乗ってもらうこともあ



作業の様子

るんだよ。作業員の皆さんがいなくちゃ調査ははじまらないし、おかげで調査員は、大変な調査も乗り切れる！作業員さんに足を向けて寝られないんだなあ。

令和3年8月1日号
第1507号

【発行】水戸市 ☎029・224・1111(代表)
〒310-8610 水戸市中央1-4-1
ホームページ / <https://www.city.mito.jg.jp>

【編集】みとの魅力発信課 ☎029・224・5188
✉kouhou@city.mito.jg.jp